

牛のことわざで生き方学ぶ マダガスカルの門前の小僧

“人は見かけによらぬもの”というが、見かけによらないのは人間だけではない。

第二次大戦後、世界各地に登場した新興独立国などもそうで、通りいっぺんの常識から判断すると、とんでもない誤解をするような国がいくつもある。

アフリカ大陸の東南、インド洋に浮かぶマダガスカル（共和国）もその一つで、ここはガラパゴスと並んで、別名“進化論の島”ともいわれるが、そんな“考古学的イメージ”とは裏腹に、わが国の一・六倍と、大して広くもない国土に約一千万頭もの牛を擁する牧畜王国。国民一人当たりの頭数では、世界一の牛の天国なのである。

一方、マダガスカル人は、一人当たり年間百八十kgもの米を消費（日本は六十kg）する稲作民族で、主食の米に対して“おかず”という觀念が存在するのも日本を除けばここだけ。携帯食としての“おにぎり”を有するのも日本似なら、中に肉をつめてにぎるのもここならではの風俗。

——といって、彼らを土くさい、非文化的な人間と想像するのは失礼千万で、彼らマダガスカル人たちの間で最も尊敬されるのは、何と“気のきいた、立派な演説のできる人間”なのである。

そのため、雄弁術として、日常のあいさつや話の中に諺ことわざをふんだんにちりばめることが重視されるが、ドヴェリエールというフランス人の神父がマダガスカルで集めた五千六百三十三の諺について分析、研究したところ、諺に登場する動物でもっとも多かったのが牛の百八十八回。ついでニワトリ、イヌ、羊と続き、十一位のイノシシが三十二回だったとか。

一方、植物では米が一位で百七十三回。以下、イモ、バナナ、ピーナツなどだったが、そうした諺の一つ“牛の子は泳ぎを教わらず、貴族は演説を教わらない”は、日本でいう“門前の小僧、習わぬ経を読む”それこそマダガスカル人にぴったりとか。

また“住いはあばら屋でも、牛乳があれば貧乏人とはいえない”は、飽食時代のいましめにも。

ワンポイント・知識

ヘアフォード種とは？

アバディーンアンガス種と並んで、世界で最も飼養頭数の多い肉専用の牛です。

原産地は英国イングランド地方で、毛色は赤褐色ですが、顔から胸、腹にかけては白色という特徴ある外貌です。

頑丈な牛で、放牧に適した品種です。日本では、ほとんど飼養されていません。